

湘南国

滑稽新聞

Kokkeishinbun

核時代71年 (2016) 10/5

番外編

発行 有限会社 鐵五郎企画
東京都千代田区神田
神保町1-64-1 田中ビル4F
TEL 03-3296-2551
デザイン 鈴木美里

発行にあたって
「和多田進さんを偲ぶ会」の案内状の差出人が「有限会社 鐵五郎企画」となっていて、「鐵五郎企画とは？」と思われた方も多いのではないかと思えます。鐵五郎企画は、和多田さんが1988年に創立した小さな編集プロダクションです。「鐵五郎企画」という社名も和多田さんがつけたものです。大正から昭和初期に活躍した洋画家・萬鐵五郎の絵が好きだったことと、「強そうだから」という理由で和多田さんが決めたというのには、当時を知る先輩から聞いた人からの又聞きです。他の社名候補としては、「有限会社ガッポリ」や「バカイチの夢社」などがあつたといひます。名刺を渡しても「鐵五郎企画」を「テツゴロウキカク」と正確に読んでくれる人はまずおらず、金儲けまっしぐらな「ゼニゴロウキカク」、動物王国でもつくりそうな「ムツゴロウキカク」などさまざまな社名で呼ばれます。名前を正確に読んでもらえないという問題は確かにあります。しかし、「はい、バカイチです！」と電話を受ける自分を想像したり、「誠心誠意・低価格なガッポリにお任せください」とお客様に言ったときの説得力のなさを考えるたびに、数ある社名候補から「鐵五郎企画」を選択した和多田さんの英断に感謝の念を抑えることができません。その和多田さんが2016年6月22日にこの世を去りました。「和多田さんを偲ぶ会」に合わせ、和多田さんのこれまでの仕事をまとめたいと思ひました。全集のような壮大なものは私たちの能力では到底叶いませぬので、和多田さんが「学校ゴッコ」と言ひて立ち上げた湘南国立大学の機関紙「滑稽新聞」の「番外編」として発行することにしました。和多田さんがやってきたことのほんの一端、それも概略だけですが、和多田さんの足跡をたどる端緒にさせていただいたなら望外の幸せです。サヨウナラ、和多田さん。ありがとうございました。合掌。
鐵五郎企画 桑原奈穂子

「生は死に直結する一本道である」
1984年、39歳の時に心臓のバイパス手術をして以来、「常に死を覚悟しているつもり」。葬式もしいい。通知もしない。自己韜晦(とうかい)の才能、地位等を包み隠すことはひとつの美学でもある。死んだら「東京音頭」、「ハァー、踊り踊るなら、チョイト東京音頭」というあの曲を家族で聴いてほしい。
2003年4月7日から本紙に掲載してきた「東京日記」(この6月11日で609回も続いた)の中に書かれていた一文である。
幕別町出身のジャーナリスト、和多田進さん(70)が6月22日午後8時50分、肝細胞がんのため、亡くなった。
「わたさん」とは22年前、1994年5月に本社社長室で初めて会つた。「週刊金曜日の元編集長」というのが紹介者の触れ込みだったが、本人は「幕別出身のジャーナリスト」と自己紹介した。
実は、この年は振り返ると私の人生でエポックを画する年だった。次男、克彦の大学入学、長女、真穂の結婚、FMおびひろの開局、千年の森の開発着手、北海道ホテルの命名、社業で中心となる人物と思つていた社員に辞められ、困つてもいた。そんな折、わたさんが私のそばに来てくれた。7月から勝毎の編集委員として採用した。雑誌発行のプロ。文筆力もあり、書ける男。文芸、芝居、写真の人脈は井上ひさし、森村誠一、荒木経惟をはじめ多数。会うたびにその人脈の分野の広さ、深さには驚かされた。
筑紫哲也ら新聞界にも通じていた。左派的視点で帝銀事件を冤罪(えんざい)の角度から分析、「追跡・帝銀事件」の本も執筆、戦後の混乱期の事件、事故の取材も現場に足を運び丁寧取材をしていく。
意外だったのは、政界にも人脈を持ち、政情分析にたけていた。新聞人の私には願つても得難い人材だった。以来22年間、上京するたびにお茶や食事しながら、情報を交換した。
勝毎には東京日記のほか、郷土の画家・能勢眞美の生涯を能勢の日記から浮き彫りにした「孤影蕭然」、インタビューで13人の十勝の文化人をクロージアアップ「アーチスト図鑑」としてわかりやすく位置付けして執筆した。町や村の中心だった駅に寄り添いながら生きてきた人々たちを中心に、十勝の歩みをとどめた「駅」では、勝毎の若手記者を巻き込み、その指導もした。耕土興論はわたさんのアイデアと人選でスタートした。論説のない本紙を補完する格の高いコラムの登場となった。神田日勝を発掘したのはわたさんである。「東京日記」の500回に「帯広在住の米山将治さんに、室内風景の写真を見せてもらひ、強い衝撃を受けた。美術評論家の宗左近さんに紹介、日勝を美術雑誌に取り上げてもらった。あえて言うが、神田日勝の今はそのときはじまつたのではなかつたか」。目利きだった。
十勝の高校のブラスバンドは、全国優勝するほどの実力を現在、持っている。これは、わたさんが、ジャズ



和多田進 Watada Susumu

1945年10月5日、北海道中川郡幕別町に生まれる。幼少から高校まで帯広市で育つ。中学校3年生のとき、60年安保闘争のデモに参加。帯広柏葉高校で共産党の下部組織「民主青年同盟(民青)」をつくる。1963年、18歳で共産党に入党(30歳代半ばで、党費滞納を理由に共産党を整理・除籍)。1964年、法政大学社会学部入学。米国占領下にあった沖縄の人びとと交流した「二七度線の出会ひ」などでの活動が共産党機関紙「赤旗」で紹介される。そのため就職は絶望的な状況であったが、大学の恩師・芝田進午氏の勧めで1968年にサイマル出版会へ入社。1969年、父の死去を機に故郷・帯広へ戻り帯広市役所に就職。1971年、知人から新雑誌創刊企画の誘ひを受けて再び上京し、時代出版社で総合月刊誌『時代』の編集に携わる。時代出版社を約半年で退社し、1972年に『時代』のメンバーら3人と現代史出版会を設立。1976年7月、現代史出版会を退社。同年10月、ドキュメンタリーヤルボルターージュを専門とする晩聲社を設立。同社の社長・編集長を務める一方、1993年～1994年まで『週刊金曜日』の初代編集長として活動。1999年夏、晩聲社を譲渡。同年10月、「日本聞き書き学会」の創設に携わり、同会の講師として活躍。2001年、コミュニティサイト「ふむふむネット」の編集長を務める。2002年、写真家の荒木経惟氏とともに「日本人ノ顔」プロジェクトをスタートし、大阪、福岡、鹿児島、石川、青森、佐賀、広島県の「日本人ノ顔」を記録。2003年～2004年、中国情報誌『CHAI』の編集長を務める。荒木経惟氏、十四代酒井田柿右衛門氏、小川規三郎氏、丁如霞氏などの聞き書きを手がけるとともに、『STORY A 天才アラーキーの撮影現場』『横取り 荒木経惟の撮影現場』などの著作を発表。また、ジャーナリスト専門学校講師、札幌国際大学客員教授なども務める。2014年1月31日、肝細胞がんの確定診断を受け、余命9カ月と宣告される。ラジオ波焼灼術、サイバーナイフ治療などを受けながら、2014年11月に「(文科省不認可)湘南国立大学校」を立ち上げる。2015年10月、細菌性腸炎、敗血症となり一時重症となる。2016年6月10日、肝臓の血液検査結果が悪化したため入院。6月22日20時50分、家族が見守るなか、呼吸を引き取る。享年70歳。

故・和多田進氏を偲ぶ

十勝毎日新聞社会長・主筆 林光繁

「生は死に直結する一本道である」
。1984年、39歳の時に心臓のバイパス手術をして以来、「常に死を覚悟しているつもり」。葬式もしいい。通知もしない。自己韜晦(とうかい)の才能、地位等を包み隠すことはひとつの美学でもある。死んだら「東京音頭」、「ハァー、踊り踊るなら、チョイト東京音頭」というあの曲を家族で聴いてほしい。
2003年4月7日から本紙に掲載してきた「東京日記」(この6月11日で609回も続いた)の中に書かれていた一文である。
幕別町出身のジャーナリスト、和多田進さん(70)が6月22日午後8時50分、肝細胞がんのため、亡くなった。
「わたさん」とは22年前、1994年5月に本社社長室で初めて会つた。「週刊金曜日の元編集長」というのが紹介者の触れ込みだったが、本人は「幕別出身のジャーナリスト」と自己紹介した。
実は、この年は振り返ると私の人生でエポックを画する年だった。次男、克彦の大学入学、長女、真穂の結婚、FMおびひろの開局、千年の森の開発着手、北海道ホテルの命名、社業で中心となる人物と思つていた社員に辞められ、困つてもいた。そんな折、わたさんが私のそばに来てくれた。7月から勝毎の編集委員として採用した。雑誌発行のプロ。文筆力もあり、書ける男。文芸、芝居、写真の人脈は井上ひさし、森村誠一、荒木経惟をはじめ

多数。会うたびにその人脈の分野の広さ、深さには驚かされた。
筑紫哲也ら新聞界にも通じていた。左派的視点で帝銀事件を冤罪(えんざい)の角度から分析、「追跡・帝銀事件」の本も執筆、戦後の混乱期の事件、事故の取材も現場に足を運び丁寧取材をしていく。
意外だったのは、政界にも人脈を持ち、政情分析にたけていた。新聞人の私には願つても得難い人材だった。以来22年間、上京するたびにお茶や食事しながら、情報を交換した。
勝毎には東京日記のほか、郷土の画家・能勢眞美の生涯を能勢の日記から浮き彫りにした「孤影蕭然」、インタビューで13人の十勝の文化人をクロージアアップ「アーチスト図鑑」としてわかりやすく位置付けして執筆した。町や村の中心だった駅に寄り添いながら生きてきた人々たちを中心に、十勝の歩みをとどめた「駅」では、勝毎の若手記者を巻き込み、その指導もした。耕土興論はわたさんのアイデアと人選でスタートした。論説のない本紙を補完する格の高いコラムの登場となった。神田日勝を発掘したのはわたさんである。「東京日記」の500回に「帯広在住の米山将治さんに、室内風景の写真を見せてもらひ、強い衝撃を受けた。美術評論家の宗左近さんに紹介、日勝を美術雑誌に取り上げてもらった。あえて言うが、神田日勝の今はそのときはじまつたのではなかつたか」。目利きだった。
十勝の高校のブラスバンドは、全国優勝するほどの実力を現在、持っている。これは、わたさんが、ジャズ

「私の食い物巡礼はそのまま私の人生である。記者諸君、一生ジャーナリストと言え人間でいたいなら、食べることに投資してほしい」(東京日記600回)。
「わたさん」のわれわれへの遺言だ。(文中敬称略)
〔十勝毎日新聞〕2016年7月2日付より



鐵五郎企画 桑原奈穂子

版「受験の国のオリザ」平田オリザ著(2001)▼医療・福祉・分裂病の娘の記録「佐々木章」著(1980)▼「主旨の母の記録」堀木文子の半生宮下忠子著(1980)▼「乱語乱療」富士見産婦人科病院被害者同盟著(1982)▼「精神病院の話」この国に生まれたるの不幸「大熊」著(1987)▼「わすれない富士見産婦人科病院事件」富士見産婦人科病院被害者同盟著(1990)▼沖繩「ボクサーPART2 具志堅用高と沖繩の拳児たち」長堂英吉著(1980)▼「聞き野底マー」下嶋哲朗著(1981)▼「島どう吾ん宝」渡久地政信著(1981)▼「砂糖キビ畑のまれば」と立松和平著(1984)▼「島の風景 少年の心に記録されたもうひとつの沖繩戦」仲田精昌著(1990)▼「空白の沖繩社会史 戦果と密貿易の時代」石原昌家著(2000)▼「各国事情」地獄にない国からの報告「加藤博著(1982)▼「私のアフリカ物語 飢餓と炎熱下の国を往く」石川要三著(1984)▼「レバノンからの証言」小野伸恭著(1988)▼「社会」仔細愛情物語「中村志著(1980)▼「ペーホテルに関する総合調査報告」堂本暁子著(1981)▼「いざい」つとくに役に立つ「ドライバー」読本」自交総連著(1982)▼「赤表紙」仕事録「前川聡著(1985)▼「白表紙」仕事録「前川聡著(1985)▼「下ヤ街」金ヶ崎「中島敏著(1986)▼「NHKの受信料を払えぬ理由」佐野浩著(1988)▼「便利屋さんの話」和田平介著(1989)▼「ニッポンの蓄財術」陽小波著(1990)▼「代議士の内幕」依存的構造「板倉正著(1992)▼「なん」と丸い月が出たよ恋「獄中ルポ」中山喬著(1995)▼「在日二世の母から在日三世の娘へ」成美子著(1995)▼「罪とX(ハツ) 精神的難民の記録」和田平介著(1997)▼「近現代史」資料・細菌戦「日韓関係」を記録する会著(1979)▼「獄中

紙」すがも新聞「戦後史の証言」茶本繁正著(1980)▼「悪魔の飽食」ノート「森村誠一著(1982)▼「アーマ悪魔の飽食」森村誠一著(1984)▼「完全版三光」中国帰還者連絡会編(1984)▼「予防拘禁所」土屋祝郎著(1988)▼「玉音放送」竹山昭子著(1989)▼「裁かれた南京大虐殺」本多勝一著(1989)▼「裁かれた沖繩戦」安仁屋政昭編(1989)▼「裁かれた七三一部隊」新装版「森村誠一編(1990)▼「南京大虐殺の研究」洞富雄・藤原彰十本多勝一編(1992)▼「細菌戦部隊」七三一部隊増補版「松村」(論争)731部隊増補版「松村高夫編(1997)▼「日韓問題」朝鮮半島の危機と米軍「日韓関係を記録する会編(1978)▼「燕よお前はなぜ来ないのだ!」日韓関係を記録する会編 辛英尚訳・解説(1977)▼「金大中事件」告発 国民法廷の記録「藤島宇内著(1977)▼「ターゲット」日韓疑惑の構造と論理「中川信夫著(1978)▼「K-CIAの対日マスコミ工作 その実態と実例」中川信夫・松浦総三編(1978)▼「日韓タフ」と言論の自由「中川信夫編(1979)▼「金大中氏を殺すな!」韓国の民主化運動を考える日本人の会編(1980)▼「帰化」上」在日朝鮮人社会「教育研究所編(1989)▼「帰化」下」在日朝鮮人社会「教育研究所編(1989)▼「朝鮮統一」東北アジアの新しい秩序について1」在日朝鮮人社会「教育研究所編(1991)▼「在日朝鮮人」東北アジアの新しい秩序について2」在日朝鮮人社会「教育研究所編(1993)▼「自然環境」東北アジアの新しい秩序について3」在日朝鮮人社会「教育研究所編(1993)▼「文化」神聖喜劇の読み方」大高知尾編著(1992)▼「サザエさんとその時代」新藤謙著(1996)▼「美空ひばりとニッポン人」新藤謙著(1998)▼「パチンコの歴史」溝上憲文著(1999)▼「人文」戸坂

潤と私常とはなる愛と形見と」光成秀子著(1977)▼「考古学者の植」小野伸恭著(1989)▼「フロレタリア文学運動 その理想と現実」湯地朝雄著(1991)▼「方法論としてのヘーゲル哲学」すこぶる選所著(1996)▼「言語」日本語とテラの打ち方「岡崎洋三著(1988)▼「わらべうたとナーサリーライム」増補版「日本語と英語の比較言語リズム考」鷲津都江著(1999)▼「演劇」英伸三が撮ったふるさと「英伸三著(1989)▼「道路劇場」バヌアツへ行く」平田オリザ著(1992)▼「現代口語演劇のために」平田オリザの仕事1」平田オリザ著(1995)▼「東京ノート」S高原から「平田オリザ」戯曲集1」平田オリザ著(1995)▼「転校生」平田オリザ戯曲集2」平田オリザ著(1995)▼「火宅か修羅か」暗愚小傳「平田オリザ戯曲集3」平田オリザ著(1996)▼「都市に祝祭はいらない」平田オリザの仕事2」平田オリザ著(1997)▼「南へ」さよならだけが人生か」平田オリザ戯曲集4」平田オリザ著(2000)▼「映画」読本「シナリオ」ニッポン国産敷村「小川プロダクション」著(1984)▼「浅草で春だつた」木俣養喬著(1985)▼「続浅草で春だつた」木俣養喬著(1986)▼「芸能芸術」節談説教七十年祖父江省念著(1985)▼「職人百づくし」武田秀雄・野坂昭如文(1986)▼「写真」淑女録「原芳市」コレクショ」原芳市(1983)▼「曼陀羅図鑑」原芳市写真集「原芳市(1988)▼「ONEDAY」佐藤雅治写真集「佐藤雅治(1989)▼「夢の棲」和久六蔵写真集「和久六蔵(1990)▼「筆」定本「街の自叙伝」加太こうじ著(1977)▼「まぼろしの村1」村から日本の教師に訴える「佐藤藤三郎著(1981)▼「まぼろしの村2」村から考える日本の教育」佐藤藤三郎著(1981)▼「まぼ

ろしの村3」村から見た日本の暮らし」佐藤藤三郎著(1981)▼「まぼろしの村4」繁栄日本の村人たちは」佐藤藤三郎著(1981)▼「まぼろしの村5」万作の花の咲くころ」佐藤藤三郎著(1981)▼「サボテンの花」加太こうじ著(1983)▼「運命の賭け」大西巨人著(1985)▼「遠東の豚」大西巨人著(1986)▼「鉄が泣く」小関智弘エッセイ集1」小関智弘著(1987)▼「鉄を読む」小関智弘エッセイ集2」小関智弘著(1987)▼「愉快な百姓」藤三郎の農業日記「佐藤藤三郎著(1997)▼「文芸」文学」ヒロシママでの長い道「長瀬隆著(1989)▼「微笑の沈黙」長瀬隆著(1995)▼「差別の連鎖」永永著(1996)▼「旅」爽やかなグッドバイ「カリフォルニア」フアームのメキシカンたち」山下寿朗著(1984)▼「フアティマ」(女神)あるいは幸運」本木・F・恵子著(1990)▼「天国と地獄地獄8万キロ自転車の旅」森逸広著(1992)▼「新版」十六歳のオリザの未だかつてためしのない勇気が到達した最後の点と、到達しえた極限とを明らかにして、上々の首尾にいたつた世界一周自転車旅行の冒険をする本「通称」十六歳のオリザの冒険をする本」平田オリザ著(1996)▼「将棋」前進できぬ駒はない! 新人王戦熱血譜のドラマ」奥山紅樹著(1978)▼「プロ棋士」その強さの秘密「奥山紅樹著(1978)▼「盤上に賭ける!」プロとアマの間「奥山紅樹著(1979)▼「大山康晴VS升田幸三の巻」金子金五郎将棋教室1」金子金五郎著(1979)▼「中原誠VS大山康晴の巻」金子金五郎将棋教室2」金子金五郎著(1980)▼「米長邦男VS中原誠の巻」金子金五郎将棋教室3」金子金五郎著(1980)▼「一流棋士六人が語るとつておきの上達法」奥山紅樹著(1982)▼「たかが将棋されど将棋」奥山紅樹著(1984)▼「盤側いろは帖」奥山紅

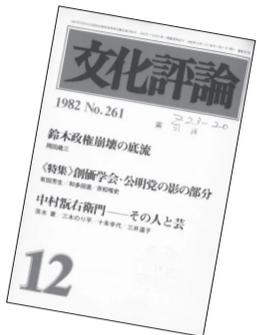
樹著(1984)▼「将棋問題集」安恵照剛著(1985)▼「この心あながちに切なるもの」金子金五郎九段の出家とその哲学「甲斐栄次編(1991)▼「その他」純粹単細胞的思考」ころん著(1985)▼「卑劣呼の木像が出た!」神門醉生著「三宅一志構成(1987)▼「大阪再見すきやねんOSAKA」平島晴剛著(1988)▼「忠臣蔵なんてなかつた」神門醉生著(1989)▼「落語家見習い残酷物語」金田一だん平著(1990)▼「まるだしのエクスタシー」ころん著(1990)▼「ボッコ」ボッコ麻葉中毒患者の手記「馬目光著(1990)▼「芥川龍之介殺人事件」神門醉生著「三宅一志構成(1991)▼「The Legend of Planet Surprise」(くり)星の伝説「Tajima Sini」(田島伸)著(1993)▼「精神世界総力カタログ1997」ブッククラブ編(1996)▼「食卓革命 高力ルシウム作物のはなし」酒井弥著(1997)▼「ころんのダイジョ」ぶ」經典「スート」ころん著(1997)▼「専門書店が選んだ、心と人と世界をめぐる本」ブッククラブ編(1997)▼「中国情報誌」CHRAMA」(中文産業)2003」2004)▼「コミュニティサイ」イト」(ふむむむネット)「(電通テック)2001)▼「ランシュとは誰か」事実か、それとも忘却か「ルイ・アラゴン」著「稲田三吉訳」(柏書房)1999)▼「週刊朝日別冊」現代ニッポンにおける「人生相談」(朝日新聞社)1997)▼「週刊金曜日」(週刊金曜日)1993」1994)▼「毒の告発」ドキュメント「帝銀事件」(シリーズ戦後犯罪史)「Sohar」2014)▼「STORY A」天才アラキー

の撮影現場」(新風舎文庫)2007)▼「横取り」荒木経惟の撮影現場「ハジリ」2005)▼「ドキュメント」帝銀事件」(新風舎文庫)2004)▼「麻原裁判の法廷から」(渡辺信氏との共著)晩聲社1998)▼「僕が右翼になつた理由、私が左翼になつたワケ」鈴木邦男氏との共著「晩聲社1997)▼「新版」ドキュメント「帝銀事件」(晩聲社1994)▼「ドキュメント」帝銀事件」(ちくま文庫)1988)▼「生きてるうちが花なのよ」編集現場で考える」(晩聲社1986)▼「編集現場でルポルターージュを考える」(晩聲社1985)▼「追跡」帝銀事件」(ペン・エム)「(敏実)「(晩聲社)1981)▼「十四代酒井田柿右衛門」遺言「愛しき有田へ」(白水社)2015)▼「荒木経惟」天才アラキー「写真ノ愛」情」(集英社新書)ヴィジュアル版2011)▼「小川規三郎」献上博多織の技と心」(白水社)2010年)▼「丁如霞」丁家の人びと」(ハジリ)2007)▼「荒木経惟」写真ノ話」(白水社)2005)▼「十四代酒井田柿右衛門」余白の美」(集英社新書)2004)▼「荒木経惟」天才アラキー「写真ノ時間」(集英社新書)2002)▼「荒木経惟」天才アラキー「写真ノ方法」(集英社新書)2001)▼「写真集」日めくりカレンダー」354センチメンタル大機」(上村陽子氏企画)日めくりプロジェクト)2014)▼「続」写真えっ!」(書肆押屋本舗)2009)

その上で、芝田の教えを受けた和野田は、自分の編集、出版する本に「核時代」年号を使いはじめたのだとも触れて下さった。私の「核時代」年号の使用については、すでに「琉球新報」のコラム「アシャギ」が書いていて(88年1月23日付)、鹿野先生はそれにも触れられた。「アシャギ」には「小さな出版社の大きな一石」と書かれていた、と。1945年8月6日、9日を境に歴史の意味は根本的に変わった。人類生存の意味がまるで変わったのだ。さらにチェルノブイリ、フクシマと続く現実、芝田の思索を残念にも証明してしまつた。つまり、「潜在的被曝者」なんかでなく、皆が「顕在的被曝者」にさせられたのである。9.11で、「戦争」の意味も変わった。満腔の怒を込めて、私は、私たちが「核時代」を生きなければならなくなつたこの時代を告発したい。その極悪非道の真犯人はアメリカ合衆国である。そのボチは日本政府だ。一己の人間として私はこれらの政府を許せない。闘う決意である。(核時代70年12月22日記(東京日記)58「十勝毎日新聞」2016年1月1日付)



著者 大高知見
編集者 鈴木一志・十浦谷孝夫
発行所 和野田進
発行所 株式会社晩聲社
1987年以降、晩聲社発行の書籍の奥付には「核時代」の年号が記されている。また、1989年に消費税が導入された際は、抗議の意を込め「悪税」と示した



晩成社と晩聲社の間

地図に描かれる北海道の形は、よくカスベという魚にたとえられる。詳しいことは知らぬが、カスベというのは北海道での名前であって正式のものではないらしい。正式にはアカエイ科のツバクロエイというのではないかと私の友人が教えてくれたが、それとて自信のもてる説ではない。

ともかく、このカスベの平べつたい菱形は、言われてみれば北海道の形に似ている。菱形の角と角を線で結んで四等分し、その右下部分に眼をやる。そこが近年「十勝ワイン」でちつとは名を知られた十勝地方ということになる。中心の都市は人口十六万弱の帯広市である。

そのむかし、この帯広市は十勝国河西郡帯広村といった。先住民アイヌの言葉で、このあたりをオベリベリという。川が幾筋にも裂けた場所、女性の性器を意味するアイヌ語だといふ。

静岡県西伊豆の旧家・依田家がこの地方を開拓しようとして晩成社を創立したのは明治十五年だった。発起人代表で、後に開拓の実際的指導者のひとりとなったのは、依田善右衛門の三男で依田勉三といふ。

依田勉三は漢学の他、慶応義塾で当時の新知識を吸収し、北海道開拓の志を立てたとされる。そして明治十四年、単身北海道に渡った勉三は『北海道紀行』を記した。

此行ハ一遍ノ周遊ニシテ、風土人情ヲ視察スルニ過ギズ。然レドモ良士ニシテ吾人

ノ棲息スルニ足ルヲ得バ、將ニ未耜ヲ荷フテ此ニ耕耘シ、以テ我ガ郷里ノ如キ人口夥多ノ地ヨリ、之ヲ北海道ノ如キ無人ノ地ニ移殖シ、其欠乏ノ万ニ補ハバ、余ガ如キ天下ノ無用者モ変ジテ有用ノモノトナラントスルノ意ヲ有セリ。……(傍点引用者)

この文章に見える通り、勉三は自らを「天下無用の者」とし、その自分を「有用の者」に生まれ変わらせるために北海道開拓の志を立てたのだ。それは、北に向かう勉三が詠んだ「ますらをが心定めし北の海風吹かば吹け浪立たば立て」という歌にも現れている。

勉三は明治十五年にも鈴木銃太郎とともに北海道に渡って踏査し、「地所開墾ニ付御下附願」を提出した。「速成ヲ望マズ専ラ晩成ヲ旨トスル」が晩成社結社の趣意であるから、適当な地所を下附してほしいと請願したわけである。この踏査で、鈴木銃太郎は単身、十勝に残って越冬したが、本格的な晩成社の入植は翌明治十六年になってからであった。

「二三戸の移民団は帯広に到着した。当時の十勝は、広尾と大津の漁村をのぞけばまったくの未開地で、アイヌの集落が諸所にあるだけであった。無人の大原野での創業は想像を絶したもので「食糧はまたたくまに欠乏し、二カ月余で早くも三戸が逃亡した」という。さらにはこの夏は「イナゴの大群におそわれた。南方から天を真黒にして襲来したイナゴに移民たちは石油缶をたたき、たいまつをたいたが効果はなかった。イナゴの去ったあとは、緑がすべて消えた。作物ばかりか縄や筵、衣服までも食い荒らされた」といふ。

イナゴの大群が襲った後は、「マリアの発生、蚊やブユに苦しみ、そのうえ降霜が早く、作物はほとんどとれなかった」。十勝ワインや赤いダイヤの町として知られる帯広・十勝の開拓期は、いまからはほとんど想像すらできない苦難の連続だったわけである。勉三の同志であった者のひとりが、「おちぶれた極度か豚と一つ鍋」と詠じたのに対して、勉三は即座に「開墾のはじめは豚と一つ鍋」ときりかえしたという逸話が残っているほど厳しい状況だった。開拓にしろ小出版社の草創にしろ、厳しさは同じだと思

わざるを得ない。もうすでお気付きの通り、私たちの晩成社はこの晩成社に由来する。私の祖母は後年になって晩成社に参加した。そうしたこともあって、私は私たちの出版社に晩成社という名前を冠したが、音とは別に一字だけを変えた。成を聲にしたわけである。その意味は、どうとつてもらってもかわらないが、最初の意図は、どんな小さな声も記録しよう、どんなに時代が暗くても、記録すべき民衆の声を記録しよう、というよ

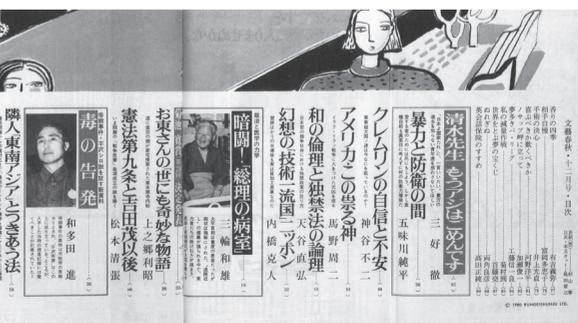
雑誌寄稿

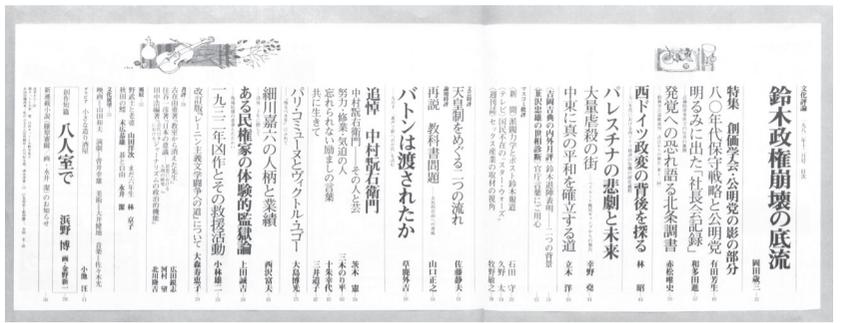
単行本や雑誌の編集、著作、聞き書きを手がける一方で、思想誌やオビニオン雑誌へ数多くの記事を寄稿しました。そのテーマは、ルポルターージュ(ドキュメンタリー)とノンフィクションの違い、ジャーナリズム論、南京大虐殺まぼろし説への反論、帝銀事件平沢有罪を覆す新資料、創価学会・公明党の影の部分、編集者としての原稿の読み方など多岐にわたります。そのなかから、晩成社という社名に込めた思いについて書いた記事を紹介します。

「帯広市史」によれば、「晩成社移民団の夢は大きかったが、現実には、あらゆる予想の上に出て、苛酷であった。第一年に受けた打撃は、ほとんど致命的であった。千古人煙を知らぬ密林・未曾有の蝗害・全身を布で包んでも防ぎきれぬ蚊と蝨・長雨と洪水旱魃野火・霜害・寒気・七回八回と反覆して襲ってくる瘧・乏しい食物・しかも一条の陸路なく、わずかに丸木舟を十勝川に浮かべて大津港に達するとはいえ、生産物の販売価格に等しい費用を要するのである。生活用品のこともくは、この丸木舟の費用で倍加する。これでは、生計のめどが立たないのは当然であった。社の開墾計画はその出発において根底から崩れ去ったのである。同志が相ついで離散したのも無理はなかった」

さらに、榎本守忠著『北海道の歴史(北海道新聞社刊)はつぎのように書いている。 「……晩成社は初年度から大きな試練にあつたが、結局崩壊した。不便な奥地で、流通条件を無視した計画の問題ばかりでなく、社員の協和を欠き、依田一族の自己本位が目だった。耕夫も規則上はともかく、現実には自作農になる道は不可能であった。勉三がいろいろ新しい試みをして、現実化できなかった」

こうして依田勉三の晩成社の歴史をひもとくとつれ、いちいち私に思いあたることがないわけではない。たとえば、「依田一族の自己本位が目だった」という箇所を私自身に置き換えて読み直すことはいったって容易なことだと思わざるを得ない。「流通の条件を無視した





鈴木政権崩壊の底流

特集 創憲公明党の影の部分 八〇年代保守戦略と公明党 野田 聖二 著
明るみに出た「社長日記」 野田 聖二 著
発売への恐れ語る北条調書 野田 聖二 著
西ドイツ政変の背後を探る 野田 聖二 著
パレスチナの悲劇と未来 野田 聖二 著
中東に真の平和を確立する道 野田 聖二 著
高橋氏の政治的責任を問う 野田 聖二 著
高橋氏の政治的責任を問う 野田 聖二 著
高橋氏の政治的責任を問う 野田 聖二 著

計画の問題」という個所にも思
いあたることがある。

勉三が北海道庁に出した『晩
成社農産概略』という文書に見
える「農作シテ僅ニ衣食シ、其
日ヲ荷重スルノミ。故ニ産物ト
言フベキモノナシ」という個所
を読めば、私は自分の胸につき
上げてくる一種の感懐とも言
うべきものを禁じ得ない気持
ちにもなる。晩成社と晩成社
は、たった一文字しか違わせな
かったがゆえに、似たり寄った
りの運命をたどらざるを得な
いのかとも思ったりする。百年
にも近い文明と歴史の進歩に
もかわらず、無惨な状況は
何故にくり返されねばならぬ
のかとも思う。

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

明治四十五年に勉三自らが
書いたといわれる報告書にも
つぎの個所を見つけることが
できる。

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

翌大正十四年十二月十二日、
勉三は、すでに村から町に発
展していた帯広町の自邸で呼
吸をひきとった。享年七十三歳
だった。

「晩成社には何も残らなかった。
……しかし、十勝野は……」

依田勉三の最後の言葉は、
「晩成社には何も残らなかった。
……しかし、十勝野は……」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「……開拓地ニ於テ三百五十
町歩 牧場ニ於テ千七百町歩
アリ……然ルニソノ負債累累
トシテ倒産ニイタルハ 業務
執行者勉三ノ不肖ノ致ストコ
ロ ソノ罪軽カラズ 小ニシ
テハ諸君ニ対シ 大ニシテハ国
家ニ対シ 万死モ謝スル能ハ
ザルナリ」

「市民の立場から主張できるジャーナリズム」を目指して

週刊金曜日

創刊のことば

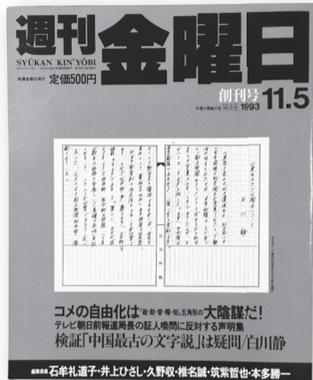
歴史学者J・E・アクトンの有名なことば「権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に腐敗する」に象徴されますように、権力の腐敗がほとんど法的であることを前提として、近代の国家は腐敗を構造的に防ぐ手段たる「三権分立」を創出しました。しかしこの三権はいずれも国家権力に属するために、しばしば癒着あるいは独裁化に陥りやすい現象がみられます。

この「癒着あるいは独裁化」を監視して未然に防ぐための最も有効な働きを示してきたのがジャーナリズムです。腐敗しつつある権力は、国民に「知られる」ことをまず最もおそれます。知らなければ国民の怒りも起きようがないはずなのです。したがってジャーナリズムは、国家権力としての「三権」からは全く独立した市民のものでなければならず、そこに俗称「第四権力」たる意味も役割もあるわけです。民主主義社会にとって健全なジャーナリズムが必須条件でもあるゆえんでしょう。

しかしながら、そのような第四権力としてのジャーナリズムも、国民の間に信頼がなければ影響力はありません。一般的に週刊誌の信頼度が過去に高くなかったのは、センセーショナルな報道や羊頭狗肉・エログロ・プライバシー暴露に走りすぎ、正確性や取材倫理・批判精神・報道対象などの点で真のジャーナリズムからかけ離れていたからでしょう。

ジャーナリズムが国民の信頼を失うもう一つの大きな原因に、国家権力との癒着あるいは国家権力の広報機関化があります。三権を監視する役割のはずが、三権の補完物と化しているのでは、第四権力としての存在理由もなくなってしまうのです。

日本敗戦からまもなく五十年。日本列島はゴルフ場などで環境破壊がすすみ、去年は日本軍(自衛隊)の海外派兵が強行され、金権政治の腐敗構造も極点に達していることが国民の前に明らかになりました。この重大な時期に、日本のジャーナリズムははたして第四権力の名に恥じぬ役割をつとめているのでしょうか。



反ファシズムのフランス人民戦線が刊行した『Vendredi(ヴァンドルディ=金曜日)』。それに刺激され、治安維持法制下の京都で発刊されるも弾圧により途絶した『土曜日』。戦後日本の民主主義を支え、34年を積み重ねたが部数の低迷により廃刊した『朝日ジャーナル』。それらの志を継承し、さらに発展させるものとして、哲学者・久野収氏が『金曜日』と命名

「スポンサーや広告主に阿らずに市民の立場から主張できるジャーナリズム、権力を監視し物申せるジャーナリズム」を目指し、また休刊した『朝日ジャーナル』の思潮を受け継ぐものとして創刊された『週刊金曜日』。広告に依存せず、定期購読者に支えられながら「真実」を報道するため、全都道府県に足を運び「金曜日」を応援する会」を組織する(ともに)、編集委員(石牟礼道子氏、井上ひさし氏、久野収氏、筑紫哲也氏、本多勝一氏)による講演会などを開催して賛同者を集めました。1993年7月に創刊準備号として『月刊金曜日』を発行し、同年11月に『週刊金曜日』を創刊。和多田さんは1993年7月号〜1994年5月13日号まで編集長・発行人を務めました。

『月刊金曜日』『週刊金曜日』(1993年7月発行号〜1994年5月13日発行号) 記事一覧

● 総自民党化の幕開け(相馬雪香 VS 三木陸子他) / 皇室タブー原稿を発表する(本多勝一) / 三説 欲情との結託(大西巨人) / 母層としての風土(上)(石牟礼道子)

● 国連の「正義」は虐殺だった(山路徹) / カンボジアの戦場へ再び(石川文洋) / そして僕らはエイズになった(石田吉明・小西熱子) / 大前研一氏こそブラック・コンサルタントだ(佐高信)

● 地球環境危機の正体(原田憲二) / 人工針葉樹林は危険だ!(多田実) / 大前研一の研究(上)(西所正道) / 文学の政治学(柄谷行人) / 角川春樹社長逮捕と神戸市長の「関係」(本多勝一)

● コメの自由化は「政・財・官・報知」五角形の大陰謀だ! (英伸三・坂本進一郎・小林節夫) / テレビ朝日前報道局長の証人喚問に反対する声明集・検証「中国最古の文字説」は疑問(白川静)

● コクド(西武)が国土を破壊する(長井新二・岩田薫・江沢正雄) / 「不偏不党」報道はあり得ない!(原寿雄・黒田清・小玉美意子他) / こうして「小選挙区制」は「正論」になった(横田一)

● 放射能の墓場を追跡する(桐生広人・小原直樹・金平茂紀・平啓介・笠井篤) / 農業復権への道(坂本進一郎) / 失望から出発(権名誠) / 苦悩と夜明け! 社会党のいま(横田一)

● 金丸信の金権「長良川」を細川政権も強行するのか! (天野礼子・渡辺斉・平野真佐志他) / 徳大寺有恒が指摘する間違いだらけのクルマ社会ニッポン / 古裂

● 大反対! 小選挙区制(石川真澄他) / 第五福竜丸との対話(英伸三) / シベリア女囚(野町和嘉) / 火砕流と土石流(石川文洋) / ベトナム帰りの韓国兵たち(中村梧郎)

● コメの自由化は「政・財・官・報知」五角形の大陰謀だ! (英伸三・坂本進一郎・小林節夫) / テレビ朝日前報道局長の証人喚問に反対する声明集・検証「中国最古の文字説」は疑問(白川静)

● コクド(西武)が国土を破壊する(長井新二・岩田薫・江沢正雄) / 「不偏不党」報道はあり得ない!(原寿雄・黒田清・小玉美意子他) / こうして「小選挙区制」は「正論」になった(横田一)

● 放射能の墓場を追跡する(桐生広人・小原直樹・金平茂紀・平啓介・笠井篤) / 農業復権への道(坂本進一郎) / 失望から出発(権名誠) / 苦悩と夜明け! 社会党のいま(横田一)

● 金丸信の金権「長良川」を細川政権も強行するのか! (天野礼子・渡辺斉・平野真佐志他) / 徳大寺有恒が指摘する間違いだらけのクルマ社会ニッポン / 古裂

● 大反対! 小選挙区制(石川真澄他) / 第五福竜丸との対話(英伸三) / シベリア女囚(野町和嘉) / 火砕流と土石流(石川文洋) / ベトナム帰りの韓国兵たち(中村梧郎)

● 大反対! 小選挙区制(石川真澄他) / 第五福竜丸との対話(英伸三) / シベリア女囚(野町和嘉) / 火砕流と土石流(石川文洋) / ベトナム帰りの韓国兵たち(中村梧郎)

● 大反対! 小選挙区制(石川真澄他) / 第五福竜丸との対話(英伸三) / シベリア女囚(野町和嘉) / 火砕流と土石流(石川文洋) / ベトナム帰りの韓国兵たち(中村梧郎)

● 大反対! 小選挙区制(石川真澄他) / 第五福竜丸との対話(英伸三) / シベリア女囚(野町和嘉) / 火砕流と土石流(石川文洋) / ベトナム帰りの韓国兵たち(中村梧郎)

現代ニッポンにおける「人生相談」



1997年6月15日発行
発行●朝日新聞社出版企画室
企画・編集●株式会社人生相談社
編集人●和多田進
アートディレクター●安西水丸
デザイナー●藤本やすし

〈編集人後記〉

悩みは歴史である、と、言ってみたく衝動にかられる。しかし、歴史とは人間の悩みの集積であり痕跡である、というのがいいのであろう。そんな思いで本誌を編集した。あとは読者の審判をまつのみである。
安西さん、藤本さんをはじめ、いちいち名前は挙げないけれど実に大勢の友情に支えられて本誌は成った。みなさん、ありがとうございました。(わ)



編集後記

- 三月一八日の本誌「創刊決定一周年記念東京大講演会」は大盛況で無事終了することができました。遠方からも大勢の読者の方々が来て下さっていたことを知り、感謝の気持ちで一杯です。誌上からではありませんが御礼申し上げます。
- 前記「講演会」で久野収編集委員が雑誌における編集者・編集長の役割の重要性ということを指摘されました。八四歳になられる哲学者の力みなぎる励ましの言葉を拝聴しつつ、いろいろなことを考えさせられました。久野さんの言葉を現実の問題に生かしていかなければなりません。
- 久野先生の言葉を拝聴しつつ、改めて「市民」ということについても考えたのです。私の理解で言えば、市民は自立した主体性のある人間のことだと思うのです。そのような人間が市民だとすれば、彼は孤立をおそれず、たったひとりでも自ら信ずるところを述べ、述べたところを実践・実行するような人間であるに違いありません。
- 「……教訓が学ばれるのは、より多く、間ちがいや失敗の経験からであって、真理や成功の経験からではない」（『平和の論理と戦争の論理』）という先生の言から学びつつ、私たちは市民に成長していかなければならぬでしょう。市民とは勇氣ある人間の別称でもありませんか。（わ）

『週刊金曜日』20号(1994年4月1日)「編集後記」より

山口怜子の世界

『週刊金曜日』5号

(1993年12月3日)

● あれは「大死」だった！藤原彰・岩井忠熊・石田雄・作間忠雄他／日本人と日本農業を破壊する「コメ」の自由化(中)／小林節夫／ゼネコン汚職解明と小選挙区制導入(横田一)

『週刊金曜日』6号

(1993年12月10日)

● 加害の記録——南京大虐殺「日記」(小野賢二・吉田裕他)／コメ自由化反対！高橋良蔵・坂本進一郎／「書評」という名のもとに(佐川一政)／異質の価値の共生と「殺すな」(小田実)

『週刊金曜日』7号

(1993年12月17日)

● 細川亡国政権倒閣の烽火を！四つの大罪(浅井基文・國弘正雄・山中高吉・暉峻淑子)／消費税を廃止せよ！(宮本憲一・北野弘久他)／民主モンゴルの夜明け(松田)

忠徳

『週刊金曜日』8号

(1993年12月24日)

● 最後の晩餐——クリスマスとお正月は農業三昧で！(マッド・アマノ)／三宅征子・中村梧郎・本谷勲他／衆院解散・総選挙を！／筒井康隆氏の「断筆宣言」をめぐって(鈴木邦男他)

『週刊金曜日』9号

(1994年1月14日)

● 農民は怒っているぞ！／警察に逆らえなくなる日(今井亮二)／緊急報告「日の丸原発」建設計画を暴く(諏訪勝)／新春巻頭言「清戦争一〇〇周年」(江口圭一)

『週刊金曜日』10号

(1994年1月21日)

● シリーズ女たちは訴える(農家篇)／トヨタが傲慢になるメカニズム(梶原一明)／VS徳大寺有恒／「珠洲市長選」で何があったのか(上)／(明石昇二郎)／「忿怒」宣言(坂本進一郎)

『週刊金曜日』11号

(1994年1月28日)

● 憲法・国家・市民——日本の現代(久野収)／連合政権与党の中からも出始めた長良川河口堰批判(桐生信也・高見裕二)／原発がやってくる町からの報告(落合誓子・小山内明志他)

『週刊金曜日』12号

(1994年2月4日)

● 小選挙区制は成立したか？増田れい子・田英夫・青島幸男・多田実／目撃：南京大虐殺(小野賢二)／長編ルポ 赤い夢から覚めて(第一回) (諸星清佳)

『週刊金曜日』13号

(1994年2月11日)

● 自動車は憲法違反だ！(杉田聡)／攻防10日間——小選挙区制と社会党の行方(大脇雅子・岩垂寿喜男)／投書特集「映画について考える」／北海道・十勝平野で何が起きているか

『週刊金曜日』14号

(1994年2月18日)

● 企業のための「規制緩和」政策を批判する(岩動武志)／ブラジルで何が起ったか(ヤノマミ)／民族虐殺の真相(ブリュースリアルベル)／病理現象としての「英語問題」の本質(中村敬)

『週刊金曜日』15号

(1994年2月25日)

● 私にとって天皇(天皇制)とは／僕が「右翼」になった理由(鈴木邦男)／昭和天皇の行動原理(岩井忠熊)／ジリノフスキーとロシアの現在(藤)

井一行・シヨレス・メドベージェフ他

『週刊金曜日』16号

(1994年3月4日)

● ルポ ニッポン 原発官民複合体の野望(上) (諏訪勝)／再び、バイオ時代のチツン予研を裁く(上) (芝田進午)／長良川河口堰の問題点について再度指摘する(天野礼子他)

『週刊金曜日』17号

(1994年3月11日)

● 女をめぐる時代は逆回り(近藤和子・竹見智恵子)／子どもたちの戦場——混迷する南アフリカのいま(松島多恵子・前田春人)／迷・眠・祀——馬場由起子の世界／現場から長良川河口堰問題を見る(河村隆史他)

『週刊金曜日』18号

(1994年3月18日)

● 唄独楽の旅 宇宙的な時間を夢見ながら(住井すゑ)／石牟礼道子／オリバー・ストーンの三部作から考える(大西赤人・佐藤忠男・石川文洋)／ふたつの祖国への思い(高沢皓司)

『週刊金曜日』19号

(1994年3月25日)

● 「課税の適正化」は本当に適正なのか 税金パトロール第一回(富岡幸雄)／国際的な疑惑にいかに応えるのか(藤田祐幸)／おんなたちの帰りみち(むろはしくにえ)

『週刊金曜日』20号

(1994年4月1日)

● ルツコイ元副大統領が明かすロシア内戦の瞬間(今井)

一／31年目の「芦浜」(高橋宏)／黒人側から見た貧困と未来(植村佳弘)／「新純潔教育」キャンペーンの問題点(浅井春夫)

『週刊金曜日』21号

(1994年4月8日)

● わたしが学校へ行かない理由(わけ)／子どもたちの声他／北朝鮮の核疑惑と日本の対応(武者小路公秀・萩原遼)／明るい材料がほとんど見えない今年の「就職戦線」

『週刊金曜日』22号

(1994年4月15日)

● 右傾化するヨーロッパ諸国(村上信一郎・山本健治・伊藤公雄)／政治改革は「終わった」のか？(横田一)／奇妙で危険な三浦裁判(弘中惇一郎)／五十嵐二葉・服部孝章

『週刊金曜日』23号

(1994年4月22日)

● 「連立政権」はどうなっていくのか(篠原一・石川真澄)／何のための「脳死」推進なのか(濱邊祐一)／四万十川歩いて下る(多田実)

『週刊金曜日』24号

(1994年4月29日)

● 「臓器移植法」は「臓器収集法」だ(西邑亨)／八ヶ岳山麓を破壊する観光開発(野池元基)／「種子戦争」はどこまで来たかI(天笠啓祐)

『週刊金曜日』25号

(1994年5月13日)

● 戦争と民衆を考える(石川文洋)／第二次連立政権の戦略と陥穽(伊東秀子・渡辺治他)／『週刊金曜日』創刊決定一周年に寄せて(久野収)

中国情報誌『CHAI』



発行●中文産業株式会社
編集長●和多田進
デザイン●トサカデザイン
表紙イラストレーション●しりあがり寿

日めくりカレンダー
『35.4センチメンタル大磯』



2014年1月1日発行
発行●日めくりプロジェクト
発行者●上村陽子
写真撮影・編集●八百屋白菜
ブックデザイン●鈴木一誌+上村隆博

中国情報誌『CHAI』の編集長(2003年9月号)と2004年2月号)として、同誌の大幅なリニューアルを実施。また、現代美術家・蔡國強さんや作家・莫言さん(2012年にノーベル文学賞受賞)などのインタビューも行いました。

神奈川県・大磯町在住の上村陽子さんが企画し、和多田さんが「八百屋白菜」の名前で大磯町に住む580人の人びとの笑顔を撮影・編集した日めくりカレンダー。65回全国カレンダー展で銀賞と飯沢賞を受賞。東京や大阪で開催された同展展示会に出品されたほか、ドイツのシュツットガルト市などで行われた国際カレンダー展でも紹介されました。

がある。たとえば、大西さんは短歌や俳句が好きだけど、短歌や俳句は構造的なものじゃなくて、すごく抒情的なものだよ。そのときの悲しさを嬉しさというものは論理的に整合性があるものじゃないけれど、しかしなんらかの真理を言い当てている。そういうものが好きというの、やっぱりある種のロマンチストなんだよ。

2人に共通するのは、正直で、良質で、知的な弱さ。おれのはそんな水準にはまったく到達しない、単なる軟弱な人の憧れみたいなものなんだ。そういう自分を克服したいというところはたぶん一緒だろうけれど、そのために彼らは一生をかけて小説を書くとかするわけじゃない。おれには、それがいいんだ。

専門家になる気持ち悪さっていうか。それは専門家になれない気持ち悪さなのかもしれないけれど、なにかを専門的にやるということに興味がないのよ。なにかを専門的にやっている人は好きだよ、すごいと思う。それは、おれが専門家になれないからじゃないかな。なれないし、なりたくもないっていうさ。

だから、ディレクターというか、常に素人でいつづける人にもすごく共感するんだよ。たとえば、中川一政という絵を描いたり随筆を書いたりした、何者かよく分からない人にもすごく共感を覚えるんだよ。魯山人もそうだよ。陶芸や絵画、書どれもすごい水準に達しているんだけど、それが職業なのか分からない。

つまり、名刺に肩書がつかないわけよ。それがすごいと思う。肩書がついた途端に気持ちが悪くなっちゃうというかさ。だから、「編集者」と言われるのも気持ちが悪い。まあ、せいぜい「ジャーナリスト」かな。「ジャーナリスト」というのは職業のことじゃなくて、そのように生きる生き方のことなんだ。別の言い方をすれば、いついかなる場合も素人として生きていくことだから、ただ、なにひとつ、まともがない。だけど、それはなかなかいいなあと思うんだよ。

転向論

大学の卒論は「転向論」だった。左翼の人が警察に連れていかれた途端に左翼じゃなくなって体制派になっちゃう。それがなぜ起きるのかというのが卒論のテーマだったのよ。

1回目の転向

1回目の転向、体制派から左翼になるためには知的な手続きが必要なんだよ。体制のなかで生きてきて、それをさらに進化させるの

はたいした勉強をしなくてもいいんだよ。だけど、体制派から左翼になるにはただボートと生きていけばそうなるわけじゃなくて、かなり勉強しないとね。おれは、そこに軟弱なんだと思うのね。差別がなくなると、どんな人も物心両面で豊かな暮らしができる社会を実現したいというのが左翼だと思えば、簡単に言えば、労働者でありさえすれば左翼になる資格はあるわけだよ、資本家でないかぎりさ。世の中の矛盾に目覚めてそれを解決したいという人のことを通称左翼と言っているだけで、免許があるわけじゃない。だから、命がけでそうなるかどうかということだけだから、どう言ったらいい

んだらう、まあ、そういうことだよ。やさしいことを難しく言うとか、そういうことじゃないんだよ。ただ、たとえば辺野古の基地はないほうがいいというのが左翼だとして、なぜないほうがいいのかを論証するためにはやっぱり生半可な知識じゃできない。だから、勉強する。つまり、知識の問題じゃなくて、生き方の問題なんだよ。どのようになっているのかという問題なのよ。



イカサマ

2つあると思うんだよ、命がけで左翼になると、装いで左翼になる人。芸術家もそうだよ。ベレー帽をかぶって、キャンバスと絵筆を持って歩いて、「お姉さん、あなたをモデルにしたい」と言えばだれかついてくるかもしれないけれど、イカサマだということはずぐに分かるじゃない。世の中ではそれを「イカサマだ」と指摘する人が少ないだけで、でも本人もこれはダメだと分かるんじゃない。そういうタイプのひと、精進して勉強をつづけていくタイプと、やっぱり2種類になるんじゃないだろうか。

そういうことはなんにでもあると思うよ。だけど、人びとは専門性や肩書に憧れるんだよ。それが知的なものであればあるほど、憧れの極致に達するのよ。原稿用紙と万年筆を持って歩いて飲み屋で原稿を書いて、「なにをお書きですか」と言われた瞬間に恍惚となるようなさ。「なにをお書きですか」と聞いたやつも尊敬しちゃったりするんだよ、その姿を見ただけで。知というものはそういう気持ち悪いなにか、魔力があるんじゃないの。

戦争に反対するワケ

戦争に反対するのが左翼じゃない、結果として戦争に反対せざるを得ないのよ。

すごく簡単に言えば、左翼というのとはどんな人も物心両面で豊かな暮らしができる社会を実現したいという生き方だろうと思う。戦争が嫌だというのは、そういうことを根こそぎ奪ってしまうから、それが許せないということなんだ。戦争になれば、人びとの命や暮らしが、幸せや豊かさとは逆の方向にやらざるを得ない。人に銃を向けて殺す、殺される、そういうことが是認される状況だから人間の心も荒廃する。それは、豊かとはまったく逆でしょう。ありとあらゆるものが平和でなければ、どんな人も物心両面で豊かな暮らしができる社会は実現できない。そのいちばんの要因は戦争、人の殺し合いだから、まずそういう状況を脱却しなければいけない。だから、左翼は戦争に反対せざるを得ないんだよ。

世界中に迷惑がかかるかもしれないことに自分が加担するのよ、「原発をつくってください」「再稼働してください」と言えなくなら、「政府が悪い」とは言えなくなら、そもそも福島だって金をもらって賛成したやつがいるから、あんなものができたんだよ。とても恐ろしいことを、庶民は苦もなくやってのけているわけよ。

責任転嫁のマジック

沖縄のことに対して、左翼が敏感になるのもそういうことよ。3000億円の振興予算を沖縄に投入する約束をして辺野古に基地をつくることで、普天間は安全になるかもしれない。だけど、もっと危険な基地があの島にできることが、なんで豊かな暮らしを保証することになるの。国が未来永劫3000億円ずつパカパカ出すというのなら、まだ話は分かるよ。だけど、そんなことをしたら人間は働かなくなるし、荒廃しか起きないじゃない。

原発も同じだよ。原発ができる町にはたんまりお金がいくから、町議会を開けばみんな賛成に回るわけだよ。だけど、そこで原発事故が起きたら、その町に住んでいる何万人だけの話じゃすまなくて、日本中、世界中が被害を受けることになる。原発建設に賛成したその町の何万人の人たちは、それらの被害について補償できるのかというんじゃない。

「平和のために戦争をする」

「平和のために戦争をする」というのは常套句なんだよ。ナチスだって平和のためにユダヤ人を大量虐殺したんだから。これから虐殺するために戦争します、なんて言うたのは歴史上だれひとりいないよ。いま日本で起きているいろんなことはそういうことだよ。もつとひどい、抜き差しならないことになってくるんじゃないか。

終戦か、敗戦か

日本の左翼運動は大きく分けて社会党系と共産党系があって、その決定的な違いは日本が独立した独占資本主義の国か、なかばアメリカに隷属した日米独占資本主義の国かという定義なのよ。独立して、自分でなんでもできる資本主義だというのが社会党系で、労働派の向坂逸郎といった人たちの理論はそちらに傾斜しているわけよ。一方の共産党は、日本はアメリカになかば隷属した、自立できない資本主義だと定義して、おれは依然として共産党のほうがいいと思ってる。日本の資本主義というのは、アメリカに隷属した資本主義なんだよ。会社からなにからすべてアメリカにコントロールされることを余儀なくされて、さらにいつそそこに組み込まれている資本主義なのよ。

これは敗戦以来、ずっとそうなんだ。それは8月15日が「終戦の日」なのか「敗戦の日」なのか、9月2日との関係はどう考えるかということにすべてが現れているのよ。8月15日は「終戦の日」、戦争が終わった日なんだ。そして、9月2日に日本は「敗戦」したのよ。だから、トータルでいえば日本は敗戦国なんだよ。だけど、政府は敗戦とは言わずに、8月15日の「終戦の日」だけを毎年記念しているから、戦争がなんとなく終わったようなイメージにどんどんなっているわけよ。いちばんの問題は日本に、とくに権力に日本は戦争に負けたという自覚がないことよ、これは法の体系やその後の政策、アメリカとの関係すべてに反映している。ひとつずつ言えば気が遠くなるくらいいろんな問題があつて、それはすべて終戦という認識からはじまっているんだよ。でも、日本は戦争に負けたんだという認識に立てば、さまざまな事柄についての考え方が全然変わってくるのよ。

たとえば、1945年3月10日に東京大空襲を受けた、8月6日には広島に、8月9日には長崎に原爆が落とされた。軍事施設があるわけでもないところを爆撃して、無抵抗な庶民が焼き殺されているわけだよ。それに対してなぜ怒りが起きてこないのか。こんな国、世界中見わたってないよ。国民がみんなテロリストになったっておかしくないよ。でも、日本はやっぱりできないことをやられても、みんな黙っているのよ。それは終戦だと思ってるからだだよ。だけど、日本はこのようにして戦争に負けたんだと考えれば、アメリカに対して「きみたちはやっちゃいけないことをやっただろう」という憎悪と抗議の精神が生まれてくるし、それから反省も生まれてくるんだよ。

反省と選択

反省というのはなんでもそうだけど、敗戦という認識から生まれる反省も2つあると思うんだよ。ひとつは、この前の戦争は負けたからつぎは勝つてやろうという反省の仕方。もうひとつは、この前の戦争ではあんなに悲惨な目に遭って負けたんだから、二度とふたた

び戦争なんてしないという反省の仕方。敗戦ということになれば、このどちらかを選択せざるを得なくなるわけだ。

それで、二度とふたたび戦争はしないというのが憲法9条の考え方のよ。だから言われてその憲法をつくったとしても、二度とふたたび戦争はしないとなればそこから出発するしかないのよ。だけど、終戦だということになれば、反省しないで済んじゃうんだよ。

福島原発事故も同じだよ。あれほどの被害が出ているのに、責任をとった人はだれもいない、責任をとらせようもしない。いまだに法の体系も責任をとる人がだれかを決めていない。だから、川内原発の再稼働をめぐって、事故が起きた場合は「国が責任をもって対処する」と言っているけれど、あんなのは言いつばなしだよ。だって、法的にだれが責任をとるといって、とを決めないんだから。電力会社もとりません、政府もとりません、自治体もとりません。被害を受ける人たちは「ゴクローサン」という、それだけの話よ。この国をずっと覆ってきたのは、権力者のそういう精神とシステムなのよ。

日本はおかしい

いまほどクリアではないかもしれないけれど、アメリカの属国としてしか生きていけない日本はおかしい、日本はだれもが幸せに暮らせる権利を奪われている国なんだという事に気づいたのは高校生ときだった。そのことを直接言った人はいないけど、やっぱり高校の先生たちがそれをおれに気づかせてくれた気がするのよ。だから、学生運動をしようとか、なるべく学生運動が激しい大学を選ぼうとか思ったんだよ。おれ、そのときすごく純粋で、職業革命家になろうと思っていたから。

毎日、腹筋運動はできません。ときどきはやるけれど、そんなに熱心に腹筋つけたても仕方ないじゃないみたい、そういういい加減な気持ちで出てきてしまう。だから、結局、向いていないんだろ。うな、腹筋運動には、こうやって寝てるのが向いているのよ。

本は眺めるためのもの

本というのは読むためのものではなくて、眺めるための道具だと思ふんだ。おれの蔵書を見て「この本を全部読んだんですか」と聞く人がいるけれど、全部読んだら頭が爆発するくらいよくなっちゃうよ。まあ、そんなことは不可能なんだよ。

本の見極め

暇つぶしに本を読んでいる人、本好きというのは、アホな人だとおれは思うよ。本の世界に逃げ込んでいられるだけで、クソの役にも立たないというか、それで完結している。すべての本はなんらかの動機があつて、自分にとって必要だからはじめに読むものだと思うんだ。たとえば、自分が痛になったから、痛について知りたいと思う。それで本を読んでいくうちに、癌の原因や治療法といった医学的なもの、癌を題材にした文学的なもの、死とはなにかについて書かれたものというふうにならされていく。あるいは、そこまで切実じゃなくても、映画

画を観てその原作を知りたくて読みはじめるとか、ある種のやや切実な思いがあれば簡単に読めるものじゃないと思うんだ。

本は読む必要のないもの、必要なきときに読めばいいものなんだよ。だからこそ、この本が自分にとって必要になるかどうかの見極めが必要なのよ。この本は買うべきか、買わざるべきかの見極めが。何万円出して買わなきゃいけない本もあるし、タダでも買う必要がない本もあるんだよ。

本を扱い慣れている人は、それが的確に分かるんだ。簡単なことでは、少なくとも日本中の出版社の傾向がみんな頭に入っている。岩波書店はこういう価値判断で本を出しているだろう、角川書店はこうだろう、幻冬舎はこうだろうと、それでまず分る分けしていくわけよ。

さらに著者が頭に入っている。この著者ならこうだろう、ああだろうとやっていて、幻冬舎のこの著者なら生涯読む必要はないとパスしていく。それでもなにかの際にそういう本が必要になったときは、古本屋で買うとかするわけだよ。だから、部屋にどういふ本があるかというのは、その人の脳味噌の開示のようなものだと思う。そういうものだと思うよ、本と人間の関係というのは。

本の集め方からして間違っている人がいるよ。たとえば、企業の社長なんかは知的でなきゃいけないと思つて、やたら金をかけて本をいっぱい買うわけよ。それらを読んでいないことは確かなんだけど、もつと問題なのは本の集め方が間違っているんだよ。言ってみれば、腕の立たない料理人が各種包丁をピカピカに磨いて飾っているのと似ていて、書評に書いてあつた本がアトラダムに並んでいて、でもどれひとつ使ひこなせていない。見る人が見れば、「こいつはバカだ」というのが分かるんじゃないのかな。

1964年

1964年に法政大学社会学部に入った。

学生運動は60年安保闘争でピークを迎えて、それから四分五裂して下火になっていった。かつては共産党の影響下にあつた全日本学生自治会総連合(以下、全学連)に反共産党のセクトがたくさんできて、バラバラになっちゃったわけだよ。それで、いろんな党派が全学連を再建しようとする。再建というのは、全国の国立大学も私立大学も一つの組織に加盟するというか、できるだけ多くの学生を集めて全学連をもう一回つくり直そうということよ。

おれがいたのは代々木系、つまり共産党系(民青系)の全学連を再建しようというセクトで、学生運動のセクトとしてはもつとも大きかった。それで、1964年12月に共産党系(民青系)の「安保反対、平和と民主主義を守る全国学生連絡会議(平民学連)」が全学連を再建する。全学連を名乗っているところはいっぱいあつたんだけど、全国の国立大学のほとんど主だった私立大学を統一した全学連をはじめてつくつたんだよ。

この年は、現在も問題になっている戦後処理についての日韓会谈(第7次)があつたり、トンキン湾事件を口実にアメリカが本格的にベトナム戦争に介入したり、その一方で東京オリンピックが開かれたり、そういうことが団子状態になって起きた年で、学生たちは学生運動にどんどん興味をなくしていく一方で、まだ60年安保闘争の余韻がクロスしている時代だった。

それで、ちょうどその年に再建された共産党系の全学連が沖繩の日本復帰というのをはじめて言つて、「沖繩を返せ」という運動をやるんだよ。各地の学生によるリレーで東京から沖繩までをつなごうという運動で、何ヶ月もかか

て沖繩に行くんだ。そのリレーの第一走者がおれで、鎌田から川崎ぐらまで歩いたんじゃないかな。そのときの写真が「赤旗」とかに載つただけで、その瞬間に「もう就職はできないな」と思った。そういう覚悟がある時代だったんだよ。

サイマル出版会

1966年10月21日、おれが大学3年生のときに日本労働組合総評議会(総評)がベトナム戦争反対のゼネラルストライキを実施して、全世界の反戦運動団体にもベトナム戦争反対を呼びかけた。おれたちも電車を止めるために、国鉄新橋駅に行つて電車から運転士を引きずり降りたりしたよ。まあ、本

当はデキレースなんだけど。運転士本人は電車を降りたくないのに、おれたちが無理やり引きずり降りして一種の軟禁状態にしたというほうが運転手の罪が軽くなるから。品川駅で2万人ぐらいの学生に座り込みをさせて電車を止めてきたらみんな捕まわつて、慌ててUターンして逃げた。

学生運動の正規軍は表に出て全学連の役員なんかをやるんだけど、おれは共産党だからそれを操る係みたいな感じだった。表にはあんまり出ないけど、学生ホールで学生に声をかけて「赤旗」を取らせるとか、学生運動に入る学生を増やす活動をずっとやってきた。そんなわけで、おれはもう就職はできないと思つていて、大学院に残ろうかとか考えていたんだ。学生運動をやつていた友達はブルガリアだかハンガリーだかに留学していたしね。

そんなとき、大学の廊下を歩いていたら、ゼミの指導教員だった芝田進午先生に呼び止められたんだよ。「就職は決まつたか」って聞かれて「いいえ」と答えたら、「きみはぼくより文章が上手だから、こゝへ行きなさい」と言われて、その場

で履歴書を書かされた。芝田先生に言われた通り、その履歴書を持ってアメリカ大使館の真ん前にあつたサイマル出版会に行つたらその場で採用されて、つぎの日から働くことになった。それで1967年、大学4年生の夏からサイマル出版会に入ったんだよ。芝田先生が「卒論だけ出せばいい」と言うから、おれはたまに大学に行つて卒論だけは書いて、あとは毎日サイマル出版会で仕事していた。

出版界の奇人

サイマル出版会の編集長兼社長は「出版界の奇人」と言われていて、怒ると熱いような顔が入つたドンブリが飛んできたり、皿が飛んできたりするような激情型の人だった。社員の全員がその被害に遭つていたけど、おれだけは一度も遭わなかった。

この人はやっぱり才能があるボスだとおれは思つていたんだ。そうすると、どうすればこの人が喜ぶかを考えるんだよ。だから、出勤時間より30分くらい早く会社に行つて、その人が使っているすべての赤鉛筆を毎日削つていた。むかしは原稿に朱を入れるのに赤鉛筆を使つていたからね。窓の棧なんかをピツと触つて埃があると怒り出す人だから、窓の棧も椅子の脚も乾拭きをかけてゴミ一つ落ちていないように掃除をした。そういうことがなんの苦にもならないんだよ。その人が仕事をしやすいようにするのが、おれの仕事だと思つていたからすごく楽しかった。

弁当買ひも名人だったよ。この人はなにを欲しているかが本能的に分かるんだよ。この前はあれを食つていたら、昨日はあれを食つていたら、じゃあ、今日は海苔巻でないとダメだなみたいのがあつて、パツと海苔巻を買つてくる。そうすると、まったく文句を言われないわけよ。だから、ほかの人は

徐々に弁当買ひに行けなくなつて、おれの役目になってくるんだよ。

思いついたら、やらなきゃいけない

サイマル出版会に入りたいとかそういう気持ちはまったくなかったけど、行つてみたら「これがたぶんおれの天職だ」って思った。だって、仕事が嫌だと思つたことが一度もないんだもん。そんな奇人変人の編集長でも、毎日会社に行くのが面白くてしょうがないんだ。時間さえあれば編集長が原稿に朱を入れてるところを後ろから見ていた。そうすると、1ページ3秒ぐらいのペースで見ながら、パツと朱が入るんだよ。それで誤字・脱字が見えちゃうなんて、この人は天才じゃないかと思つた。おれには生涯かかって無理じゃないかと思つていたけど、後におれもほぼそれに近くなつた。そのスピードで誤字・脱字が見えるようになるんだよ。

入社してすぐに取次にも営業に行つたよ。取次がどんな仕組みなのかよく分かってないけれど、会社の金が足りないと思つたら取次に「2000部買つてくれ」とか言つて交渉していた。取次が「うん」と言つたら、彼らの気が変わらないうちに自分でライトバンに本を積み込んで納品しちゃう。そういう無理がきいた時代でもあつたんだけど、担当者が「うん」と言うまでテコでも動かないとか、何度でも行くとかして、強引にでもそういうふうに行つていくわけよ。当時、大阪屋という取次に畠山さんというおじさんがいて「若いのによくこんなことができるな」って驚いていたけど、そうやって東販や日販の窓口でもだんだん顔になつていった。

そういうことが自然にできたのは、たぶん共産党で活動していたからだと思ふ。もしも共産党の活動をしなければ人生が変わつていたと思うよ。いまやっているのも同じことなんだ。編集というか、

仕事というのはオルガナイザーなんだよ。オルガナイザーを仕事と言うんだよ。つまり、さまざまな人や考えやモノを組織して形にすることなんだよ、仕事というの。

そうじゃなくて、単に人から言われたことを「はい」と言ってるだけの人は属国みたいなものだと思ふ。言われたことを「はい」と言う、ただそれだけの人生なんだよ。そういう人はオルガナイザーとして生きていこうとする人に比べてたら、人生の面白さは10分の1だと思ふ。人から言われたことを「はい」と言ってるやつも、そこに達成感なんか全然ないもん。そのかわり、自分が主体的にこうしたいということを実現する面白さを味わうには、思いついたらやらなくちゃいけない。それが苦になる人もいるし、ほかのことをやったほうが良いという人もいる。だけど、生きていくというのにはおれにとってはそういうことで、だから面白いんだよ。

陳腐千万

編集もやったよ。小さい出版社だから、なんでもやらざるをえなかったんだ。おれが最初に関わったのは『基地沖繩—返還のためのレポート』という本だった。編集長に「本の題をつけろ」と言われてつけたら、「陳腐千万」とか言われて全然採用にならない。得意な言葉が「陳腐千万」なんだよ。心の中では「バカヤロー」と思ってたけど、題なんか全然つけさせてもらえなかった。

『基地沖繩—返還のためのレポート』というのは琉球新報社が編集した本で、B52がエアカーゴで秘密裏に沖繩に運ばれてきた写真が入っていた。それは、沖繩で見つかったらアウトな写真だよ。当時は小さな地方空港みただった羽田空港にゲラを取りにいったり、そんなこともやっていったよ。

しかしまあ、編集長の社員に対する罵り方があまりにもひどいから



ら、言語暴力に反対する労働組合をつくって出版労連に入ったんだよ。編集長が連れてきた子飼いの幹部2、3人を除いて、おれたち7、8人の社員は全員組合員になったんだけど、編集長の狂った性格は変わらなくて社員は嫌になってどんどん辞めていって、とうとう組合員で残っているのはおれ一人になった。ある日、編集長に呼ばれて、「お前が首謀者であることは分かっているけども、反省すれば置いてやる」と言われたよ。だけど、おれは「反省しない。さよなら」と辞めたんだ。

ちょうどそのとき親父が死んでお母さんが一人になったから、お母さんの面倒みなきゃと思って北海道に帰ることにした。1968年の8月かな、夏の終わりだった。69年、いや、もつと後だな、70年前後。お母さんの面倒をみようなんて奇妙な仏心が出たのは、一生のうちでそれきりだよ。

人間たらし

人間たらしなんだよ。好きなんだよ、たらしの。だって、人間ってそういう関係にならない限り面白くない。相手のことが好きでないとつまらないじゃん。それが高くと好きすぎて腹が

を聞いたときに、「これはいける」と思った笑。そう言ってもいまだに彼女は信用しないけどね。後ろから見たら、まるで鉄兜みたいな頭の形なんだよ。この鉄兜で、この音を出せるのはいいと思うわけよ。そうすると、やっぱり相性がいいんだよ。本当にダメなやつなんだけど得難いんだ。やっぱり大物なんだよ。

「聞き書き」とゴーストライター

新聞記事にしてもなんにしても、基本はすべて「聞き書き」なんだよ。違う言葉でいえばインタビュ。相手が話したことをその人の口調を残したまま書くか、それとも相手が話したことを咀嚼して書くかの違い。話した人、話者が主人公で、話者の口調まで活かして表現するのが「聞き書き」なのよ。だけど、考えてみれば人間の暮らしはインタビュで終わっているんだよ。インタビュというのはいくつかの質問を答えることだから、それを記録したら「聞き書き」になるわけじゃない。

「聞き書き」とゴーストライターは似て非なるものなんだ。ゴーストライターは話者の思い通りに書くわけだから、聞く人の主体性はないのよ。「それはちょっと違うんじゃないの」と思ってもほとんどのことはどうだってよくて、話者が「そうだ」と言えばそうなるんだよ。金になるから多くの人がやっているとらるけれど、それはすぐにつまらなくなる。だって、「こいつ、アホじゃないの」と腹のなかで思いつつながら相手の話を聞いているわけだから。それで、相手の話があまりにも変であれば指摘して、たとえは「2000年に黒電話のダイヤルを回すのはおかしいですよ」とか指摘して、「あ、間違えた」とか言えたら、それはダメなんだよ。逆に言えば、全知全能を傾けても相手

をほかに人に伝えるためにするわけだから、その話は誰かに伝える価値があるという判断が存在するのよ。だから、「聞き書き」をする人は、まず話者を選ぶ。それから聞く事柄も選ぶ。聞く側が聞かれる側を誘導していく、そういうやりとりが必要になるわけだよ。つまり、話者の話を引き出すのは聞く人の力にかかっているのよ。だから、できあがったものはうんと似ているけれど、「聞き書き」とゴーストライターではそこに至るプロセスや心理、いろんなものが180度違うと言ってもいい。

話を引き出すのは結局、人間力対人間力の勝負なんだよ。聞く側の埋蔵量が聞かれる側の埋蔵量の足元にも及ばなければ、話を聞くことなんてできないわけよ。本当に「聞き書き」をするとなれば、相手の判断は間違っているんじゃないかというやりとりをしなきゃいけないし、相手が言っていることの真意はどこにあるかを考える埋蔵量がなくちゃいけない。その埋蔵量が少なければ、まったくダメな「聞き書き」になるわけだよ。

たとえば、民族学者の宮本常一が木こりの爺ちゃんの「聞き書き」をしたら、爺ちゃんがしゃべったエッチな話から村の歴史や構造に頭がめぐって、その村が立体的に見えるきたりする。だけど、埋蔵量が少ない人が「聞き書き」をしたら、木こりの爺ちゃんがスケベな話をしました、それでおしまい、となるわけよ。

全知全能を太らせる

「聞き書き」の原稿というのは、たとえ字が間違っていようが、「てにをは」が間違っていようが、誰かに指摘してもらって直せばいいんだから、そんなのはたいしたことじゃない。だけど、筋書きが狂っていったら、それはダメなんだよ。逆に言えば、全知全能を傾けても相手

きないとか、あるツボで必ず歪んだ解釈をしてしまおうとか、そういうことが起きたらこれはもうダメなんだ。

だから、自分の全知全能を太らせるしかないんだよ。それは一生かかってどうなるかわからないことだけれど、全知全能が少し太ったという一つのメルクマールは、以前にやったことで「ああ、そうか。ここがダメだったのか」と気づくときだと思ふ。そのときは恥ずかしい思いもあるけれど、グッと大人になった気もするんだよ。その回数が多ければ多いほど、自分のなかでなにかが変化しているんじゃない。その回数があまりない人は何事に対しても全知全能がかかっていないから、そういうふうにならないんじゃないのかな。

世界によって自分が変えられないために

大抵のことは、無駄で無意味なんだよ。だけど、無意味だからやらないほうがいいかといったら、おれはそうは思わない。マハトマ・ガンディーが言うように、そういうことをするのは世界を変えるためではなくて、世界によって自分が変えられることを防ぐためなんだ。つまり、自分の頭で立つ、ということなんだよ。

沖繩の辺野古基地建設に反対することは、ある面から見れば無意味かもしれない。だからやらなくていいんじゃない。それでもやっただけがいいんだ。なぜなら、辺野古基地建設を放置することによって自分が変えられていくことを防ぐためなんだよ。

このレトリックが分かるというんなことを見えてくるよ。誰かが言ったことや書いたことを覚えて納得するだけではなかなか分からない。自分自身でそれを発見することが大事なんだ。だから、自分が話したり実行したりしたことについて、おかげに言えば理論化する。もつと簡単に言えば、「なぜ自分は

分はそういうふうと思ったのか」を常に考えつづけることが大切なんじゃないだろうか。

考えつづけること

2014年3月に大西巨人さんが亡くなって8ヶ月になるけれど、原発に反対だった大西さんが最後に「原発には賛成だ」と言った意味をずつと考えつづけているんだ。それは謎のような言葉で、もしも原発によって地震が起きたのであれば私は原発には反対だ、しかし地震によって原発が壊れたのであれば原発には賛成だというレトリックなんだよ。この意味はいったいなんだろうとずつと考えていた。

おれはこの言葉の意味をいまは解明したつもりでいて、まあ、それはいつか書こうと思っているけれども、ともかく彼はそういう考えに至ったわけよ。つまり、人間がなにかを考えていくと、これが正しいか否かを考えることになるのよ。先験的に原発をダメだと考えることは誰にでもできる。だけど、原発には賛成だという人がいて、それはなぜだろうと考えたときにはじめて自分の根拠の甘さとか、反対することの意味とか、さまざまなことが見えてくる。それが哲学だとおれは思うんだ。おれの大学の先生はみんな哲学者だったけれど、哲学というのは難解な話じゃなく

て考えることなんだよ。癖になるぐらい考えているか、考えていないかで、5年、10年と経つうちにどんどん差が開いて、20年経つたら「アホな人」と「アホでない人」ぐらいの差がついていっちゃう。そうしたら、話すことが変わる、書くことが変わる。顔つきまで変わるとおれは思う。おれが「死ぬまでにハンサムになりたい」と言っているのは、そういう意味なんだよ。でも、考えつづけることは楽しいことでもあるんだよ。こうやって富士山を見てお茶を飲みながら考えるのは、なかなかのもんだ。

47都道府県の「顔」を記憶する試み

荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト

荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクトの趣旨

荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクトは、全国47都道府県すべての地域に暮らす人びとを撮影し、総計数万人の日本人の肖像を記録しようとするのが国初の試みです。言うまでもありませんが、ここで言う「日本人ノ顔」とは国籍や人種に関係なく、日本列島に暮らすすべての人びとという意味です。

それぞれの地域の風土や歴史等を体現している人びとの肖像を、アラーキーこと荒木経惟が「日本人ノ顔」として撮影します。そして、撮影したすべての人の肖像写真を収録した写真集を発行するとともに、撮影地で写真展を開催します。

このプロジェクトは、ドイツの写真家アウグスト・ザンダーが第二次世界大戦の直前に試みて未完に終わった「20世紀の人間たち」の意図に通じるものもありますが、日本が世界に誇る写真家荒木経惟が全力をつくし挑戦する試みであり、完成すれば世界にも類を見ない大事業になることは疑う余地がありません。

人びとの誇りと元気をとりもどし、後世への貴重な財産を残したいというのが、このプロジェクトの願いです。

20世紀を生きてきた人びとの「顔」を記録することは、20世紀の日本のすべてを映し出すことになるはずですし、21世紀に生きる人びとを写し撮ることにほかなりません。それは現代日本の貴重な記録として後世の貴重な史料にもなるでしょう。

荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト
代表 和多田進

荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクトの軌跡



「広島ノ顔」

撮影期間●2009年6月
応募総数●1,200組/2,500人
撮影総数●460組/1,030人
写真集●『広島ノ顔』(2009年10月発行)
写真展●2009年10月10日～12月6日(広島市現代美術館)
主催●広島市現代美術館/荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト



「石川ノ顔」

撮影期間●2004年5月～7月
応募総数●3,400組/4,800人
撮影総数●430組/700人
写真集●『石川ノ顔』(2004年12月発行)
写真展●2005年1月29日～2月20日(金沢21世紀美術館)
主催●金沢21世紀美術館/荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト



「大阪ノ顔」

撮影期間●2002年1月～5月
応募総数●5,200組/7,800人
撮影総数●840組/1,680人
写真集●『大阪ノ顔』全3巻(2002年11月発行)
主催●紀伊國屋書店/荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト



「青森ノ顔」

撮影期間●2006年4月～6月
応募総数●3,000組/4,600人
撮影総数●400組/690人
写真集●『青森ノ顔』(2006年9月発行)
写真展●2006年10月7日～12月10日(青森県立美術館)
主催●青森県立美術館/荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト



「福岡ノ顔」

撮影期間●2002年10月～11月
応募総数●3,200組/4,700人
撮影総数●420組/740人
写真集●『福岡ノ顔』(2003年2月発行)
写真展●2003年2月9日～3月9日(福岡アジア美術館)
主催●荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト



「佐賀ノ顔」

撮影期間●2007年9月
応募総数●1,200組/2,000人
撮影総数●400組/850人
写真集●『佐賀ノ顔』(2008年1月発行)
写真展●2008年2月15日～3月2日(佐賀県立美術館)
2008年3月12日～20日(唐津市民会館)
主催●佐賀県/荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト



「鹿児島ノ顔」

撮影期間●2003年6月
応募総数●3,000組/4,500人
撮影総数●410組/720人
写真集●『鹿児島ノ顔』(2003年10月発行)
写真展●2003年10月3日～11月3日(霧島アート森)
主催●荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクト



© Araki Nobuyoshi

2002年より荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクトをスタートし、大阪ノ顔、福岡ノ顔、鹿児島ノ顔、石川ノ顔、青森ノ顔、佐賀ノ顔、広島ノ顔と1府6県でプロジェクトを展開しました。各地の「日本人ノ顔」のモデルは公募によって募集し、厳正な審査の結果、モデルになっていた方を決定しました。プロジェクトのモデル応募総数は約2万200組、3万900人、モデルとして撮影させていただいた方は約3,360組、6,410人にのぼります。

〈文科省不認可〉 湘南国立大学校

2014年11月5日、「文科省不認可」湘南国立大学校」と称する学校を立ち上げ、「校長」をはじめました。校歌は「黄昏のピギン」です。事務局の上村陽子さんとともに、各界からさまざまな講師を招いて講座を開き、機関紙『滑稽新聞』やFacebookを通じて情報発信を行いました。2015年1月から同年8月までに開講した講座は29回となります。

湘南国立大学校の開校にあたって

湘南国などというクニはも
ちろん存在しません。無駄かつ
無意味な何事かを発信する基
地が湘南であることから、その
地をクニに見立てた遊びです。
クニではないので国境もあり
ません。要するにゴッコとして
の学校遊びをはじめようとい
うわけです。

冗談からコマということも
あるかもしれませんが、ヒマ
のない人はヒマを作ってご参集
ください。
講座開校地はさまざまです。
あるときは鎌倉、あるときは
は藤沢、あるときは東京、九州、
四国だったりします。巡礼の旅
人のように開講地を変えてい

くということですが。まあ、その
ときその場所に合ったところ
で開講するわけです。融通無
碍。神出鬼没の大学校とい
ことになりましょうか。
受講料はいただきます。1
回ごとで、前売り整理券はだ
いたい1000円から3000
円。当日券はいずれもプラス
500円とします。
なお、潤沢な運営資金です
る遊びではありませんことをご

考慮いただければと思います。
本大学校「開校のことば」を
お読み下さればお分かりのこ
とは思いますが、私たちが自
身の視界を拡げることによっ
て、もしかしたら私たちは今日
までとは違った人生を生み出
せるのかもしれない。その希
望を捨てずに、この試みを応援
して下さいますよう心からお
願い申し上げます。
湘南国立大学校校長 和多田進



画家・牧野伊三夫さんが描いた
湘南国立大学校の校章

開校のことば

あなたがすることはほとんど無意味であるが、
それでもしなくてはならない。
そうしたことをするのは、
世界を変えるためではなく、
世界によって自分が
変えられないようにするためである。
ある人物はそう述べました。
またその人は、
生は死から生じる。
麦が芽吹くためには、種子が死なねばならない。
とも述べたのでした。
これらのことば、つまりこれらのことばの根本にある考え、
それらをわたしたちは
本学開校の「ことば」にしたいと存じます。



湘南国立大学校 全講座

津田美奈子さん

治療室ナチュレ室長。鍼灸あん摩マッサージ指圧師。自身の出産経験から小児鍼灸（大師流）を学ぶ。

●お母さんのための東洋医学講座（全3回）1月24日（土）、2月28日（土）、3月28日（土）

蓮池透さん

1955年新潟県柏崎市生まれ。2005年まで「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」事務局長、副代表。

●拉致問題をどう考える（全3回）1月30日（金）、2月6日（金）、2月13日（金）

柳本真弓さん

目白鍼灸院院長。テレビや雑誌でも幅広く活躍中。著書に『NHKきれいの魔法保存版美に効くツボ』など。

●めぐりのいい体のすすめ&ツボ体験（ささない鍼）（全1回）2月1日（日）

斉藤とも子さん

女優。神戸市出身。1976年デビュー。井上ひさし作「父と暮せば」、映画「ひめゆりの塔」等に出演。

●朗読とお話（全2回）2月15日（日）、2月21日（土）

●「Canta! Timor」映画&トークの集い（全1回）5月30日（土）

原芳市さん

写真家。1948年東京生まれ。『ぼくのジブシー・ローズ』で第17回準太陽賞受賞。

●写真をめぐる冒険（全5回）2月25日（水）、3月11日（水）、3月25日（水）、4月8日（水）、4月22日（水）

岸本明子さん

フリーランスライター。1971年、東京生まれ。2010年から三代澤村宗之助の後援会運営に関わる。

●歌舞伎ノゾキ見る（全2回）3月1日（日）、3月12日（木）

町田康さん

小説家。1962年生まれ。パンクミュージシャンとしても活躍。「きれぎれ」で第123回芥川賞受賞。

●町田康さんと本を読む（全1回）3月15日（日）

藤井貞和さん

詩人、日本文学（おもに古典）研究。詩集『ことばのつえ、ことばのつえ』、詩論『人類の詩』など。

あなんじゅばすさん

1996年結成。正岡子規の短歌から谷川俊太郎の現代詩まで100年の「ことばをうたうバンド」。

●ことばをうたうバンド・あなんじゅばす
コンサート+スペシャルゲスト・藤井貞和（朗読）（全1回）3月22日（日）

倉澤治雄さん

ジャーナリスト。1952年生まれ。元日本テレビ政治部長。著書に『原発ゴミはどこへ行く』など。

●未来への負の遺産～原発ゴミを考える（全1回）4月11日（土）

田野城寿男さん

サクソ奏者。1958年生まれ。ボストンのパークリー音楽院卒業。写真家・荒木経惟、イラストレーター・黒田征太郎などと共演。

●音楽の再発見 和声や調律のなぞについて
—モーツァルト、ストラヴィンスキーそしてマイルスデイビスまで—
（全4回）4月19日（日）、5月24日（日）、6月21日（日）、7月26日（日）

マッド・アマノさん

1939年生まれ。1978年、パロディストとして独立。『原発のカラクリ』『マッド・アマノの「謝罪の品格」』など著書多数。

●仏風刺新聞社襲撃事件の真相
〈安倍首相が風刺を毛嫌いのワケ〉（全1回）6月7日（日）

古賀茂明さん

1955年生まれ。元経済産業省官僚。古賀茂明政策ラボ代表。2015年5月外国特派員協会より「報道の自由の友」賞を受賞。

●この国と私たちはいまどこに向かっているのか（全1回）6月19日（金）

十五代酒井田柿右衛門さん

1968年生まれ。2013年、第48回西部伝統工芸展にてKAB熊本朝日放送賞受賞。2014年、十五代酒井田柿右衛門襲名。

●柿右衛門様式の真髓を語る（全1回）6月27日（土）

牧野伊三夫さん

画家。1964年生まれ。美術同人誌『四月と十月』発行人。『暮しの手帖』（暮しの手帖社）など装丁・装画多数。

●「僕は、太陽をのむ」牧野伊三夫の
即興ペインティング（全1回）7月18日（土）

島洋子さん

1967年、沖縄県生まれ。1991年、琉球新報社入社。政経部、社会部、政治部などを経て、東京報道部長。

●沖縄の記者が語る沖縄のいま（全1回）8月1日（土）

聞き書き 蔡國強さん 自伝(未完)

和多田さんが初めて蔡さんのインタビュをしたのは2003年のことで、その内容は中国情報誌『CHAI』に「爆発する心―蔡國強の旅―上下」と題して掲載しました。その物語のつづきを『芸術新潮』に連載するため、2015年11月に蔡さんが宿泊していた都内のホテルでインタビュを行い、同年12月には蔡さんの生まれ故郷・泉州取材しましたが、2回目の原稿を書き上げたところで体力と気力ともに限界を迎え、執筆を断念しました。そのすべてを掲載するのは紙面の関係上無理ですが、冒頭だけでも紹介したいと思います。

1 現代美術の運命と私

お話ししたのは、もう12〜3年前のことですね。和多田さんに私の「自伝」のようなことを。あれは未完でしたから、自伝の試作版ね。今回は「完成版」。

前半は13年前のものをベースにした私の生い立ち。私の作品がどのようにして生まれたかは、私の生い立ちの中に隠れているはずですからね。

後半は、主として私の作品に関する私自身の「解説」(オマージュ)とか「愛」(リスペクト)という感じになっているかも知れませんがね(笑)。

他の芸術分野でもおそらくそうだろうと思いますが、現代美術の分野にかぎって言うても、これはまったく「戦争」と同じことです。いまやアートの世界は国や大企業、いろんなスポンサーが「軍艦」に乗って世界中を動いているんですよ。シンディ・シャーマンとかマシュー・バニーとかはほんのひとつの例かもしれません。

西洋を舞台に効果的かつ無限に発展していこうとするならば、西洋的なシステムを使わなければいけないのは確か



© Hara Yoshitichi

んでしょ。すでにそういうシステムが世界的に定着しているんですから。

日本にはいまだにそういうアーティストが大勢いると思いますが、いま考えるとむしろ「戦」と同じだったんですね。自分の作品の値段や販売する枚数、いろんなことをせくんぶ自分で勝手に決めて売って。でも、これってどう考えてもマーケット的じゃない、ゲリラ的やり方です。

いまの「戦争」にはルールがありません。人工衛星から地面を走る戦車まで、動き方は全部コンピュータで決まってるんですね。ハハハハハハ……。まず爆撃を先にして、それからマスコミを使っていろんなニュースを流します。まさに

「総合戦争」ですね。自分はいつもそう思ってきました。

中国もいざ「ゲリラ戦」じゃなくなるよ。中国という国のシステムも、中国人のやり方もアメリカ的になりますよ。日本は、西洋に比べればまだ自衛隊という感じですよ、ハハハ……。

日本では現代美術の国際交流も許されていますし、まして現代美術は国内では主流の美術と言えるんじゃないですか？ これはもう十数年も前の話ですが、中国は一生懸命プロフェッショナルになろうとしています。アーティストとの契約とかね。西洋の画廊と一緒に組むとか、西洋のコレクターの趣味を学ぶとか、オークションに出品するコレクションのサイズを西洋の基準サイズに合わせるとか、いろいろ考えているんです。

発展は早いです。でも、そうやって損することはあります(笑)。結局、世の中、全部得になるなんてことはないから、どちらかを自分で選ぶしかないね、ハハハハ……。私自身のことを言えば、前よりいまのほうがやりにくいよ。理由は、私のビッグバンからある程度弱まってきたというか、エネルギーの質が少し変化してきたということがありますね。また、システムはできるだけ無視してやってきたんだけど、どんなに無視しても無視できないこともあって、一緒にやっていくとシステムに慣れてもくるんです。

それに、作家としての素材もテーマも豊かになってきたから、それをもう一度整理してくてはいけません。立場も以前よりうんと複雑になったからね。以前は、ただのひとりの若いアーティスト、世界に向かっ

てやってきた人、あるいは中国人のアーティスト、アジアから出てきたアーティストであって、私自身のビジョンはハッキリしていません。

しかし、いまは「世界的なアーティスト」と言われ、「西洋ではみんな知ってる人」です。別にアジア人とか中国人じゃなくてもよくなった。そういうことのあいまいさがいっぱいありますね。そして、ビジョンについてもいろんなことが分かってきました。いろんなことというのは欲に関わっています。欲、ですよ。ハハハ……。

周りの欲、ということもある。自分の企業経営も大きくなってる。15年前だって、何もなくてもオフィスを運営するのに1日数百ドル使わなくちゃいけなかった。それが1年間だと数十万ドルくらいはかかりました。だんだん企業みたいな動きの大きな運営になっていくですよ。動きが大きくなると、大きいパワーを持ちますから、うんと自由になる一方、自由になれなくなることも出てきます。だから、そのところを繰り返し考えなければなりません。

イベントアートは、自分の未来が危険だと思って挑戦していきたくなるものですかから、これは分かりやすい。しかし、アーティストにとって最も危険なのは、一定の年齢が来て、一定の世間的評価が定まることです。そうすると、みんな本当の革命はやらなくなる。詳しい例を挙げることはしたくないですけど、20年くらいやってくるとだんだん熟成してき

て、もつと完璧に作ろうということになるだけです。生々しくなくなっちゃうんですね。でもまあ、人間は新しく、ビッグチャンスにチャレンジできるから分らないですから、むしろそれが「自然」なのかも知れないんですけどね。だからあらゆる面で、もう一回自分に勝つ、自分と闘うということが大きなテーマになってきます。……

和多田進さん あのととき、あのことろ



1・1981年、晩聲社創立5周年 / 2・3・晩聲社時代 / 4・2000年、イタリアにて / 5・1997年、森村誠一さんと / 6・1997年、晩聲社の社員旅行で韓国へ / 7・2002年、荒木経惟「日本人ノ顔」プロジェクトにて

「和多田進さんを偲ぶ会」

発起人●荒木経惟、井上都、蔡國強、斉藤とも子、十五代酒井田祐右衛門、鈴木一誌、名村義人、林光繁 (五十音順)

日時●2016年10月5日(水) 18:00~20:00

場所●中国飯店 三田店